



# 倫理の転換点 2

## 設定

ノンケ警察官(カントボーイ化) × カントボーイ専門調教販売師

18 禁小説です。

変態露出狂のカントボーイ(女性器をもつ男性)を捕まえた警察官八雲圭太が、その変態露出狂の主人である五条剛にカントボーイ化ウィルス被打たれて、代わりの奴隷、販売用の商品にされていく。

2では圭太の同期や父親も登場します……。

ディルド責め、同期や父の前での羞恥、水責め、ベルト打ち、犬扱い、豚扱い、豚鳴き、露出等

※♡表現多めの作品です。

15500 字程度で、画像のみ AI で作成しています。

## 登場人物

八雲 圭太(やぐも けいた) 25 歳 警察官

行方不明の父の背中をおいかけ、警察官になった。正義感が強い。佐藤の調教で自身のマンコの快樂におちていった。

須藤 実(すどう みのる) 25 歳 警察官

圭太の同期。圭太と同じく佐藤に強い不信感を持つ。

五条 剛(ごじょう つよし) 40 歳 カントボーイ専門調教販売師

ウィルスで男を無理やりカントボーイにして、調教、販売している。

佐藤 学(さとう まなぶ) 45 歳 警察官

圭太の父の同期で、また、圭太の上司でもある。実は五条とつながっていて、圭太の情報を流していた。調教済みの圭太を五条から買い取った。

八雲 大地(やぐも だいち) 45 歳 元警察官

行方不明の圭太の父。

## 日常

佐藤の家に移されてからというもの、圭太の一日は決められたルールで始まり、ルールで終わるようになった。

日を追うごとにそのルールは増え、気づけば圭太の行動のほぼすべてが、佐藤の決めたルールもしくは許可に依存するようになっていた。

佐藤から与えられるルールは、どれも些細で、日常的で、しかし圭太を支配するのに重要なものばかりだ。

- ・家では与えられたハーネス、首輪、下着のみ着用する
- ・朝は佐藤よりも先におき、佐藤のペニスに奉仕する
- ・佐藤が外出時は玄関で土下座して佐藤の帰りを待ち続ける
- ・常に2つのアナにはバイブを挿入し、佐藤の許可を得たとき以外ははずしてはいけない
- ・夜は、電気を消した部屋で自分の役割を声に出して復唱する

一つひとつは実行するのはそれほど大変ではない。しかし、それが積み重ねられるたびに、圭太は少しずつ自分で考えることを失っていった……。

じゅぷぬぷッじゅぷっぬぽっぬぷッじゅるじゅるッじゅるッ♡

「うう……朝からそんなにがつついて変態なやつめ」

「おはよう……うう……ございます……♡ご主人様……ううッ……♡」

佐藤はベッドの上で目覚めると、朝から自分のちんぽをしゃぶっている圭太をみて嘲笑する。圭太は前の孔と後ろのアナをバイブに犯されながら、自分のクリトリスをびくつかせ、佐藤のペニスに奉仕している。その口でつつみこみ、佐藤の陰茎の包皮を上下させ、その芯に刺激をあたえていく。自身の唾液を全体にからませながら、その陰茎に快感をあたえられるように必死に自分の頭を上下させていた……。

「いい様だな、八雲。どうだ散々反抗していた俺に奴隷のように扱われるのは？」

「はい……あゝあッ……♡ご主人様との……昔の……やりとりを……うう……ッ思い出すと、とても……恥ずかしく思います……おおう……ッ……いひん……♡今は……自分の……本性を知れて……あひいん……ご主人様に……うう……ッ♡お仕えすることができて……とても……幸せです♡」

「ははは、馬鹿な奴だよな。俺にさからっていなければ、こんなことにはなっていなかったかもしれないのにな。さあ、俺にキスをしろ。自分のこれまでの行いを反省しながらな、はははは」

圭太はしゃぶっていたペニスをはなすと、仰向けで寝ている佐藤に覆いかぶさるように顔を近づけ、唇を重ねていく。

最初は唇で佐藤の唇をやさしく包んでいき、そして舌を中に……。口内の上下左右すべての場所を自身の唾液で満たしながら、佐藤の口内に自分の証をマーキングしていった。目の前にあれだけ嫌っていた上司の顔があるというのに、圭太はその男と唾液を交わし、そして自身の孔を濡らしている……。

五条の教えではもっと丹念に口内を刺激するように教えられていたが、佐藤の口内をなめていると圭太もさらに興奮し、我慢できずに舌を佐藤の舌に絡め始める。

べろべろべろッちゅばああべろべろべろおお……ちゅばちゅばちゅばあ♡

「そんなにがっついて、そんなに俺のことが好きか？ あんなにいびられていた俺のことを、ぎやははは」

圭太は佐藤の言葉で心にざわつきを感じながらも、自身の役目を全うしていた。体がそうしなければならぬと圭太に命令している。

「ほら、これぐらいにしてお前はソファのところのテーブルに朝食を運んで来い。お前の分はいつもの皿でな」

圭太は命令を聞くと用意しておいた朝食をテーブルに運び、自身の犬皿に盛った朝食を床におく。

「ほら、待てだぞ、食べる前に芸を確認しておかないとな。お手……お座り……おかわり……ちんちん……」

「わん……わん……♡うう……ッ……わん♡」

「お前にはもうペニスはないがな、ははははは」

圭太は屈辱的な命令を必死にこなしていく。パイプに犯され続け、延々と